

昭和の街角風景

◇1

私たちはこれから1年間にわたって昭和30年代の苦小牧を歩きながら、その街角の風景を眺める。そしてできれば、その風景の中に子どもたちの表情を見つけていきたい。なぜ昭和30年代かといえば、便利と不便、伝統と進歩、今の世の正と負につながる多くの要素が混在する興味深い時代だからであり、なぜ子どもかといえば、いつの世もそうだが、そういった社会の影響をより明らかに反射するのが子どもたちだからである。紙面に登場する子どもたちを見ながら、今の子どもたちと社会に思いを巡らさう。

■時代の交差点
紙面左側の大きな写真 この年、自動車時代に即応は、昭和31年の王子製紙の した市立自動車学校が矢代社宅街での一コマである。町に開設され、苦小牧地方の復興が成り、苦小牧では「もはや戦後ではない」と記されたのは、この昭和26年から始まった港づくりが進み、工業都市への

新入学児が前年比1割増とにかく子どもの数が多い。町内一区画を巡っただけで、20人やそこらの子どもたちに出会うことができ。それも、同年代の子どもたちがぞろぞろいる。当時の苦小牧民報が、次のような記事を載せている。「苦小牧市教委では(昭和三十一年)四月一日に新しく入学する児童の申告を一月三十一日で締切った(略)それによると二月一

であった。

子どもたちの生活も大きく変わっていった。脱脂粉乳の質素な学校給食は徐々に改善され、生活の中に洗濯機やテレビが持ち込まれ、「古き良き時代」と「新しい便利な時代」が混在する時代の交差点の中で、子どもたちは遊び、学び、次の時代へと成長していった。

子どもたちの姿が街中に



ラジオ体操に集まった子どもたち

日現在の市街地の入学児童数は、東小三百五十六名、西小五百六十八名、若草小四百三十八名、合計千三百六十二名で、昨年からみると東小は九名、西小は八十二名、若草小は五十六名、合計百四十七名多く、10・8%の増であった(昭和31年2月8日付)つまりこの当時市街地にあった小学校3校で、新1年生の学級数が10学級ほど増える計算になる。「市内の入学児童は昭和二十八年ころから一学級ずつ増えてきているが、今春はかつてない記録をつくった。この原因について市教委では、今春入学する児童は昭和二十三、四年に生れた子供たちであり、当時は終戦直後で復員者や引揚者

引き揚げ、婚姻で「団塊世代」



遊びの相談?左2人は兄妹か

昭和31年王子社宅街

風景今昔

上の写真を見よう。ブロック造りの王子社宅の前で、子どもたちが仲良く肩組みしている。帽子の記章は、西小学校のものだ。2年生か3年生くらい。男の子2人は学生服を着ている。この頃は、普段から学生服を着ている小学生たちが、当たり前になっていたのだそう。今では考えられないのでびっくり。オカッパに毛系のパンツの女の子は就学前か。

ブロック造りの住宅、舗装されていない道路。何もかも今は違う。当時、子どもたちはこうやって家の外で、元気よく遊び回っていたのだという。今の子どもたちの遊び場は公園。写真のように家の周りや道路で遊んでいたら、車が通って危ないからとしかられること間違いがない。

でも、鬼ごっこをしたり隠れん坊をしたりと遊ぶ内容は今も昔も変わらない。何だかそれにはほっこり。変わったのは子どもたちではなく、周りの環境、大人たちの生活だ。

紙面右端の写真は近所の子ども

子どもたちでにぎわった社宅街



白金町に王子社宅

今、私たちの生活も大きく変わって、4、5年前の方に比べると、建物は、パーマの。でも、面販売だ。かには、今のど



ラジオ体操に集まった子どもたち

が続々帰国したため市の人口もドツと増え、同時に婚姻も相当あったため(略)。例年、三月に入って申告する者が相当あることから、もつと増えるものと予想される」

とてもではないが教室が足りない。その後市教委は、1教室に50数人から60人詰め込めば、小学校3校の新年度学級数は東小33(前年度31)、西小45(同4)、若草小35(同32)で、9学級増で済むと算出した。

■時代につくられた意識

写真の中に登場する子どもたちはこの後、使い捨て時代を経験し、高度経済成長期をモータリゼーションとして支え、毎年1万円以上も給与が上がることに驚喜し、公害におびえ、オイルショックに驚き、バブルに踊り、そして衰退を見る。今70代の人たちの意識はその中でつくられてきた。

時代は昭和から平成、令和に至り、社会は大きく複雑化した。その中で取り沙汰されるのは「世代間格差」

馬車の後を子どもたちが歩いている。場所は王子製紙の現若葉門前の弥生町。この頃は子どもも大人も、王子構内を通過して街の東西を行き来できた。市内自動車保有台数は638台、馬車410台。ようやく自動車が馬車を上回った。(昭和31年)



の急速な広がりだ。それが何に起因するのか、昭和の街角風景を振り返り、今を見詰めれば、わずかなりとその理由を感じることができるかもしれない。

(一耕社・新沼友啓)

白金町に残るブロック造りの王子社宅



今は悠々とシカが遊ぶ

もたちのラジオ体操らしい。ざっと数えて150人ほどもいて、4、5学級分にもなる。後ろの方にブロック造りの王子社宅が並んでいる。左側の大きな建物は、「配給所」で、今のスーパーマーケットのようなもの。でも、買い物籠やレジがあるわけではなく、店員さんの対面販売だった。「配給所」の向かいには共同浴場があったという。

今どのどの辺りだろう。古い地



図で調べると、今の弥生町のホームセンター(弥生中学校跡地)の北側だったと分かった。当時でいう王子製紙西部社宅二区から三区にかけてだ。早速、その場所に行ってみると、ブロック造りの社宅街は新興住宅街や公園になり、写真とは全く違った風景があった。

写真に写っている社宅は、アッシュブロックでできていた。

このブロックは王子製紙の工場から出る石炭殻とセメントを混ぜたブロックで、いわばSDGsか。どこかにその社宅が残っていないかと探すと、弥生町の北側の白金町にあった。フェンスで囲われているので近くまでは行けない。そのフェンスの中でエゾシカがのんびり餌を食べていた。(一耕社・齋藤彩加)

昭和の街角風景

◇2

少年クラブ、少女クラブ、ぼくら(以上講談社)、少年(光文社)、おもしろブック、幼年ブック(集英社)、冒険王、漫画王(秋田書店)など、敗戦後の耐乏生活からようやく抜け出した昭和30年前後、子どもたちが心躍らせる漫画雑誌が書店の店頭の数多く並んだ。「鉄腕アトム」(手塚治虫)や「鉄人28号」(横山光輝)「いずれも少年」が夢をかき立てた。その頃、子どもたちにとっての情報源といえば少年少女雑誌、漫画であり、その発信源は「本屋さん」であった。書店は子どもたちに本と共に、夢や希望を与えた。

食料品店66店、鮮魚店20店、時計眼鏡店18店、酒店と用品雑貨店が16店ずつ、そして、本欄左上の写真にあるような書籍・雑誌店が14店と続く。

同年前後の市街地地図を見れば、駅前通りに君島書店、新生堂書店、一条通に松尾書店、三栄堂書店、大通(国道36号)に坂東書店、旭館通に兼田書店などの名前が見える。

この年の苦小牧の人口が約5万4000人、現在の人口が約16万6000人。人口比を掛け合わせれば、今の苦小牧に42店もの本屋さんがあることになる。もちろん、一軒一軒の規模は小さかったが、それらが市民の文化、生活情報の重要な発信源であった。

■クイズ流行で書店が繁盛
昭和31年のこの年、鉄腕アトムと鉄人28号に夢中に

書店は情報、文化の発信源

■昭和31年の書店

何軒あったかをまとめたも苦小牧の歴史を書きつづつた「苦小牧市史」という分厚い本があり、その中に昭和31年7月1日現在の「業名分類別店舗数」というのが載っている。平たくいえば、その頃何屋さんか

何軒あったかをまとめたも苦小牧の歴史を書きつづつた「苦小牧市史」という分厚い本があり、その中に昭和31年7月1日現在の「業名分類別店舗数」というのが載っている。平たくいえば、その頃何屋さんか



書店の店先で漫画雑誌に夢中な子どもたち (昭和31年)

昭和31年 駅前通の本屋さん

少年少女漫画雑誌に夢膨らむ



駅前通は自転車天国。自動車はたまに通るだけ (昭和31年)

風景今昔

子どもたちが集まって本を読んでいる写真(紙面上)。古本屋さんのようにも見えるが、そうではない。当時を知る人に聞くと、駅前本通の「鶴丸」向かいにあった「新生堂書店」の店先らしい。

堂々と子どもたちが立ち読みをしている。坊主頭の男の子が読んでるのは「鉄腕アトム」だ。新刊が出たのを読みに来ているのだろうか。路上に新本を陳列していることにすら驚くのに、漫画の立ち読みまで許してしまう優しい本屋さんだ。昭和のこの時代にはあったのだ。

集まっている子どもたちは小学校低学年から中学生までのようだ。また家庭にテレビがなく、もちろんゲームなどもない。外で遊ぶ以外の娯楽といえばマンガを読むことだったのだろう。店の奥ではご婦人たちが何かの本を物色している。本は大事な情報源で、この時代の本屋さんは生活に密着していたのだ。

街角にあった優しい本屋さん

今、書集まる昭和の通りがあつらん・チンコ人々で昔の
子夢中
鶴丸跡に新生奥近



駅前通は自転車天国。自動車はたまに通るだけ (昭和31年)

海道と(解答の宛先の)東京があまりにも離れているので、締め切りに間に合わない「苦小牧民報」からだという。

ともあれ、書店や本というものが、生活の中にかりと根付いていた時代であった。

■減少要因はスマホ？
全国の書店数を見れば、1980年代後期に2万8000店ほどを記録したのをピークに減り始め、2022年には8169店にまで減った。

ただ、この減少傾向の中でも、10年までは店舗の総坪数は増えてきた。つまり、小さな書店が姿を消し、大手の大型店舗に集約されていったのだ。ところが、10年以降は、総坪数も減少し始め、それが続いている。10年以降に、何があったのか。「情報」の分野で思いを巡らせば、スマートフォンの普及に思い当たる。07年に登場した「スマホ」は、瞬く間に情報活動の中心に座った。書店の店先で漫画に食い



パチンコは戦後、急速に広がった。苦小牧でも1951(昭和26)年に苦小牧パチンコ業親睦組合(8人)ができ、年々盛んになった。この頃のパチンコは、台の前に立ち、手で玉を入れてはじく(昭和37年)

代になった時代、子どもたちはスマホの画面を食い入るように見、指を動かしていた。情報の得方、在り方が大きく変わったのである。そのことと共に、誰もが不特定多数に手軽に情報を発信できるといふ慣れな行いが、多くの問題を引き起こしている。

(一耕社・新沼友啓)

がさらにいて、郵便局ホクだったと、小牧民報(昭和31年付)が報道して思わぬ繁盛を本屋さんだ。空白文章を埋め込むクイズ解答参考書まで載せた週刊誌も「ただし、問題が正しいものばかりで」といものは、北

入っていた子どもたちが60

街角にあった優しい本屋さん

鶴丸跡のホテル(左)の向かいに新生堂書店、苦小牧駅(写真奥)近くに君島書店があった



子どもたちが夢中で立ち読み

今、書店にこんなに人が一斉に集まることあるだろうか。

昭和30年代の地図を見るとこの通りにはもう1軒「君島書店」があった。他には旅館やレストラン・食堂、薬局や時計店、パチンコ店などがあり、通りは人々にぎわっていた。

昔の駅前通りの写真(紙面右)

丸善金物店本店 TEL:522	1~4	45~48
朝日ホール	5~8	49~52
白井商店	9~12	53~56
北光遊技場	13~16	57~60
双葉美容院	17	61~64
万年屋旅館 TEL:710	21	65~68
新生堂書店	25	69~72
福々まんじゅう	29~32	73~76
砂川ふとん店 TEL:114	33~36	77~80
子代田生命	37~40	81~84
スタンダードつき		
岡山家具店		

の中では、パチンコ店と自転車が目立つ。パチンコ店の前にはたくさん自転車が並んでおり、今も昔もパチンコ店が人気なのは変わらない。自転車は、通りの真ん中を横並びで堂々と走っている。

今、同じ通り(駅前本通)を訪れてみると写真のような人々のにぎわいはなく、高い建物が建ち並んで都会のビル街のようだ。車社会ではちよつと敬遠されそうな町並み。往時の本屋さんはもうなかったが、裏通りに昔と同じ名前のパチンコ店の看板が残っていて驚いた。

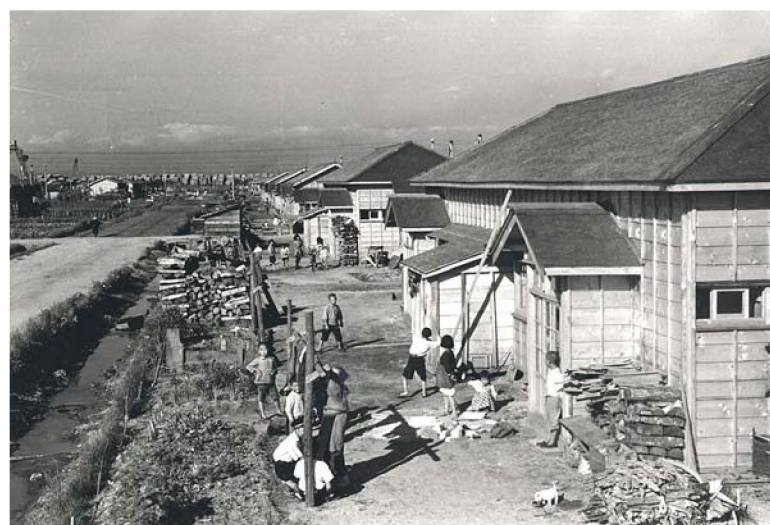
(一耕社・齋藤彩加)

昭和30年代になると、戦中戦後の物不足から解放されて、生活もほほ落ち着きを見せた。苦小牧ではベビーブームと樺太など外地からの引き揚げが重なって人口の増加が加速し、特に就学年齢の子どもの数が飛躍的に増えて、行政を慌たせた。王子製紙は戦後間もなくから昭和30年代初めにかけて社宅をどんどん建て、社宅街は現在の若草町から山手地区、弥生町、白金町にまで広がった。その中で若草小学校、北光小学校が相次いで建てられたことは、先に触れた。街のあちこちに、子どもたちの笑顔があふれた。

を削っていた頃だ。小さな写真の中の手前のグループ。女の子はままだと、男の子はキャッチボールか。それを見ている子は順番を待っているのか。その向こうはゴム跳びらしい。いずれも一人遊びではない。相手のいる集団の遊びで、そんな中で何らかの子ども社会がつくられていったのだろう。

■大人の職階と子どもたち
ところでこの頃、苦小牧は「社宅の街」として知られ、中央発の雑誌にもそう取り上げられた。1910（明治43）年に操業を開始した王子製紙苦小牧工場の建設に当たって、最初に手掛けられたのが社宅の建設であったことは、当時の写真を見れば分かる。工場の基礎掘り作業とともに、今は「中部」と呼ばれる王子町の工場正門近くに長屋風の社宅が十数棟建てられた。

子どもの笑顔は大人がつくる



山手地区の王子社宅街。家の前は子どもたちの遊び場だ（昭和30年前後）

以来、「中部」を中心にした格差が、子どもたちなりに大きくなると「東部（現若草町）へ」、「山手」へ、それぞれに分らない。

■「三百万坪」の子どもたち
（弥生・白金町）へと社宅群は拡大していく。入れる社宅の造りは職階によって差があり、家の中の専用水道のあるなしなど利便性も

和30年の国勢調査の際に、ここに10人以上の未就学児童がいるのが分かった。一番近い植苗小中学校でさえ12歳もあることから学校へ行けない。それまで分らないかったのは戦後の混乱がまだ残っていたからか。ともかくどうするか。市、市教委、市議会が頭をひねり、現地調査もした。分教場を建てるとか、造材現場のトラックに乗せてもらって通学するなどの案が出たが、結局、植苗小中学校の校長住宅を改装して「寮」を設けることにした。狭いが、風呂もある。増築も計画した。5月に入寮式をし、取りあえず低学年の8人が入った。中学1年生の男の子は、夏の間は自転車で12きの道を通学する傍ら、集落と学校との連絡を担い、また、集落に新聞など「文化」を届ける重要な役目を果たすことになった。



大人社会の発展は目覚ましく、昭和31年には道内初の公立自動車学校が苦小牧に誕生。教習車庫にはフォードもあった

7月には運動会が開かれて、三百万坪の子どもたちも走った。初めて体験した運動会だった。自然の中で鍛えられた子どもたちの足の速さにみんなが驚き、拍手を送った。

「わが子の走る姿を初めてみた父兄たちは感激の涙を浮かべ（略）他の子と親しく話合っているわが子の姿に、感激の色を浮かべていた」と昭和31年7月3日付苦小牧民報は報じている。三百万坪の子どもたちは、新しい世界と友だちを見つけた。子どもたちの笑顔、行政や大人たちがつくった。

（一耕社・新沼友啓）

遊びの中で育つ子ども社会



手作りの土俵で相撲を取って遊ぶ子どもたち（昭和31年）

風景今昔

子どもたちが相撲をして遊んでいる（紙面上の写真）。そのまなざしは真剣そのもの。下は幼稚園児ぐらいから上は中学生まで。真剣勝負だ。土俵を整備したためだろうか、スコップが転がっている。裸足で遊ぶために、まず整地からしていたのだろう。みんなはだし。これは楽しいこと間違いなしだ。泥だらけで帰宅する子どもたちのことを考えると青冷めるな、と思うのは大人になってしまったからなのだろう。

この頃の履物は短靴と呼ばれるゴム製の靴。運動会となれば足袋を履く。理由は短靴だと脱げるから。何とも単純。運動靴もあったが、全員がそろって購入することはできない高級品。その点、足袋は安価だ。

この場合の足袋というのは、一般の足袋とは違って「くるぶし靴下」のようなもの。足首は

かつての社宅街の一面は家庭菜園ができる「未来の森公園」になった



くは西小学校のもの。社宅は木造。とすれば多分ここは北光町辺りの王子社宅街ではないだろうか。

家の周りには土俵を造れるほどの場所があり、勝手に地面をほじくっても誰かに叱られることなどない。今と比較すると、どれをとっても驚きだ。子どもたちが相撲をとったあと、この土俵はどうなるのだろうか。当時土俵を造っていたであろう北光町辺りを訪ねると、家が肩寄せ合って並ぶ住宅街があった。すべてコンクリートできれいに舗装してある。土俵を造るなんてことは考えられもしないし、何しろ、今の子どもたちの遊びに相撲などというものは存在しない。

手作りの土俵で 真剣なまなざし

ゴム。足の裏の部分が少し厚くなっていた。足袋でグラウンドを走り回るのだから運動会前の石拾いは必須だったそうだ。運動会前の石拾いは今も続いている「文化」だが、理由が違う。男の子の帽子の校章は、恐ら

（一耕社・齊藤彩加）

昭和31年 山手王子社宅街

昭和の街角風景

◇4

この紙面に掲載されている古い写真は、現在70歳くらいの人たちの子どもの時代の風景だ。「おおらかな時代だった」伸び伸びと遊んだ「ずいぶんヤンチャもした」……と、楽しかった思い出が湧き出してくるだろう。でも、よく考えると、危険で、怖くて、腹が減って、痛くて、ひやりとした記憶も、楽しい思い出と同じくらいあったはずだ。今は公園ができて安全に行儀よく遊べるようになったが、何だかその分、楽しさやたくましさが減ったようだ。それが良いのか悪いのか。昭和30年代の風景というのは、そんなことを感じさせる。

■危険な遊び、危険な遊ばないように「置き石をしらないように」と口を酸っぱくした。ただ、室蘭本線では経済発展を支える石炭列車が落とした石炭を燃料として細々と拾う家庭もあった。昭和30年4月、日高線では5件の「置き石」があった。犯人は、小学生が多い。学校で先生たちが「線路に入

小牧市街地の海岸)。波が荒く、引き潮が強くて沖に流されやすい。しかし、当時の前浜は砂浜が広がり、格好の遊び場だったのだ。「苦小牧では小中学生の水死事故が毎年発生し、昨年(昭和30年)は10歳の少女が波打ち際で遊泳中、波にさらわれて亡くなった」(昭和31年8月2日付、苦小牧民報)。市教委は、前浜を遊泳禁止区域として学校を通じて警告したものの、猛暑の日には数百人もが前浜をにぎわした。プールは王子プールだけ。市営プール設置が要望されたが実現には遠く、水難救護機関では「せめてビニール製プールを」と市に要望した。この頃軌道に乗り始めた日本の経済発展は、日常生活を置き去りにしていた。

困い込まれる子どもたち

遊び場は野山、道路から「公園」へ

山も川も海も、そして道路。ここでは緑ヶ丘公園内の見路も遊び場ではあったが危険をはらんでいた。例えば道路。自動車がどんどん増え、当たり前前の遊び場から危険な遊び場へと変わっていった。「道路での遊びは禁止」「海での遊泳は禁止」と「禁止」がどんどん増えていく。その中で計画されたのが公園だ。大規模なと



子どもたちが持つさおや網は、どれも手作りのようだ(昭和37年)



旧苦小牧川上流で小魚を探して遊ぶ子どもたち(昭和31年)

昭和31年 旧苦小牧川上流

風景今昔
雪が解けて暖かくなってきた頃、子どもたちは意気揚々と小川へ繰り出していった。川へ子どもたちだけで遊びに行くなんて危ない。でも彼らは、お気に入りの場所ならどこが浅くてどこが深くて危ないかを、ちゃんと知っていたという。川へ行く目的は水遊びを兼ねた釣り。近所の畑から転がっている竹の棒を拾って、家の裁縫道具から木綿糸を持って行くか、お小遣いでテグスを買って釣竿を作る。釣針も買う。釘や針金を曲げて作ることもある。餌のミミズはそこら辺をほじって集める。これで準備万端。このさおを使うのは小学3年生くらいになつてからだそうだ。長いさおを扱うのは、少し体が大きくなってから。小さいうちは虫取り網ですくう。写真を撮ると釣りをするのに、水の中まで入っている。釣りよりも水遊びが目的だという

意気揚々と魚釣りや川遊び

現在のフェンブげな
ことが上りたいたい！
釣れるやゴダツヨウ。フ張って家で釣れるのにはいい。何だかここですら疑問までも浅い。海は



子どもたちが持つさおや網は、どれも
手作りのようだ（昭和37年）

「児童公園」のある都
市公園が計画された緑
ヶ丘公園



える。また、地域の公園に
もブランコ、シーソー、砂
場、水飲み場など、定番の
施設が整備された。

その後、児童公園はどん
どん増え、子どもたちは既
成の遊び場へと囲い込まれ
ていく。

■現在なら「非行」

この時代、子どもたちの
中には、自由奔放な雰囲気
があった。校舎の天井裏を
探検してハトの巣や卵を探
す、廃材でいかだを作って
沼を渡る。

時代の奔放さの反映だろ
うか、室蘭の小学生5人が
学校を抜け出し、列車で栗
山に遊びに行く途中、苫小
牧駅で補導されたという例
もあった。「親が心配する

とは思わなかった」「うちの
子に限ってそんなことはし
ないと思った」

中学、高校へと年齢が進
むと、行動が飛躍する。

静内町の少年(16歳)が、
港まつりが見たくて親の財
布から2520円を盗んで
苫小牧にやって来た。気づ
いた時には金を使い果たし
ており、帰りの汽車賃に困
って窃盗に及んだ。

道外の高校生が「高級船
員」になろうと家出して北
海道にやって来たが、所持
金を使い果たし、苫小牧で
土工夫(土木作業員)か日
雇いでもしようとする市内の飯
場を手当り次第に訪れたが
断られ、空腹を抱えて苫小
牧署に泣き込んだ。これら
は「太陽族」をまねたので
はないかと考えられた。昭
和30年に発表された石原慎
太郎の小説「太陽の季節」
の影響で、自分たちを囲い
込む既成秩序を無視して自
由奔放に行動する青年たち
が現れ、「太陽族」と呼ば
れていた。

現在の子もたちはどの
ように囲い込まれ、どう抗
おうとしているのか。

(一耕社・新沼友啓)

現在の「苫小牧川上流」は
フェンスに囲まれていて近
づけない



ことがよく分かる。水の中に入
りたい！ついでに魚も釣りたい！

釣れる魚はトンギョ(イトヨ)
やゴダツペ、ドンベ(フクドジ
ヨウ)。フナが釣れた時には胸を
張って家路に就いた。でも、こ
こで釣れた魚を持って帰ると家
の人には嫌な顔をされたらし
い。何だか想像がつく。

ここで泳いだりしないのかと
いう疑問を持つ。川遊びはあく
までも浅瀬のところではしな
い。海は遊泳禁止。泳ぐならプ

ールへ行く。この頃は王子プー
ルがあったのでそこで泳いだ。
いや、そこしか無かった。学校
プールさえまだ無い時代。

この写真の川は王子製紙の北
側の旧苫小牧川上流。今でいう
と、北光町から線路沿いに木場
町へ向かう道の途中だ。少しで
も当時の様子を知りたくて、現
地を訪ねた。でも、フェンスで
囲われていて、写真の場所には
行けなかった。車通りも多く、
のどかな雰囲気とはかけ離れて
いた。今の子もたちが「昔こ
こで釣りができたんだよ」と聞
いたら驚くだろう。

フェンスの向こうをのぞく
と、小さな川があり水が流れて
いる。草がぼうぼうと生い茂っ
ていて、水がきれいなかどうかど
うかまでは確認できなかったが、
写真に写っている川に出会え
て、ちょっとだけうれしかった。
当時はあちこちの川でこのよう
な光景がみられたのだそうだ。
今の苫小牧で、こんな風に子ど
もたちが遊べる場所はどこだろ
う。

(一耕社・斉藤彩加)

「遠足」という学校行事は、いつの時代から始まったのだろう。明治33(1900)年の文部省通達に「兵式教練」の一環として水泳などとともに遠足を教育の中に取り入れるようにとの指示があったというから、多分それ以前から何かの形で遠足らしきものがあったに違いない。体を鍛える、集団行動に慣れる、社会見学、そして戦後は、決められた額でおやつを買い体験も遠足を通じての勉強だとされた。ところが昭和31(1956)年、苫小牧市内の小学校でこの遠足のおやつを巡って学校、父母、教育委員会を巻き込んだ騒動が起った。以下はその顛末(てんまつ)。

西小学校では「2日午前8時半、校庭に集まった2000人を超える児童たちがお弁当を下げて、学年ごとにそれぞれ目的地へ向けて出発した。1年生(600人)は2班に分かれて坊主山と(隣の)スキー場まで初めての遠足をした。2列に並んだ1年生は先生のいうことをよく守り、喜びにはち切れそうな顔をほころばせて、イチニ、イチニと歩いて行った(昭和31年5月3日付、苫小牧民報)。人数からして大騒動だったのだろうが、これはこれで事なきを得た。

■おやつは「自由」か「制限」か

問題は東小か若草小のどちらかで起こった。新聞は「某小学校」としか書いていない。

その小学校では5月26日に遠足を予定していたのだが、たまたま授業参観に来た父母が「子どもたちに劣等感を持たせないために遠足の持ち物は同じにした方がいい」と提案した。この学校は裕福な家庭の子が多

■遠足シーズン、トップは西小
この年、西小学校の全校児童数は約2500人。

5月ともなれば、遠足のシーズンだ。新入学の1年生、クラス替えを済ませた他の学年の子どもたちが、新しい担任の先生や友達と一緒に初めて行う一大イベントが遠足だった。

5月2日、苫小牧市内の小学校のトップを切って、西小学校の遠足が行われた。

坊主山、緑ヶ丘へ向かう大行列



きょうは遠足。登校前の子どもたち(昭和31年頃、苫小牧西小学校)

「遠足のおやつ」論議を真剣に

く、そうでない家庭の子との差がかなりあった。「持ち物」とはおやつのことらしい。

「いや、実はかねがね、そう思っていたので」と学校側。そこでアンケートを取ることにした。質問は①子どもに(おやつを)自由におやつを対立して収拾がつかなく、予定されていた遠足自体が延期される始末となった。

教育委員会は「修学旅行や遠足は遊びではない。特に遠足は自然の美を鑑賞し、健康増進を目的とするので、余計な経費をかけるべきではない」と厳しい意



苫小牧東小学校の遠足(昭和39年)

風景今昔

水筒をぶら下げた子どもたちが写真の中で笑っている。学帽の校章から西小学校の児童だということと分かる。写真の子どもたちのズボンの丈がさまざまだ。長ズボンかと思えばちよつと寸足らずの子もいる。どんどん成長する子どもたちに、親の財布の中身が間に合わない。半ズボンは裕福な家庭の子に多かったそうだ。丸刈り、それに坊ちゃん刈り。ゴムの短靴なのは一緒。

写真は「遠足の日」の登校前の一枚。この頃、小学校低学年は坊主山(王子山)、中学年は緑ヶ丘公園、高学年になると北大演習林(研究林)まで歩いていったそうだ。随分と長い距離を歩いている。今の子どもたちはこんなに遠くまで歩けるのだろうか。

遠足には大抵は、お弁当じゃなく、おにぎりを持って行った。おにぎりの具は決まって梅干しだった。

山頂からの景色は激変

た。お弁当、かずを用意で代ったからりの中に大きた子もいたのやつは持って金額以内で甲おやつも用意そんな時は生ぎりとおやつに食べよう」つこりエピン今の子ども





苦小牧東小学校の遠足（昭和39年）

小学校の遠足の目的地となった坊主山（王子山）からの風景（昭和30年前後）

見。その後のあれこれの体験談からして遠足のおやつは、多くは金額で制限されていったようで、逆に言えば遠足のおやつは制限というものは、このような真剣な論議を経て決まっていたのだとも言える。

■貧富の差の今昔

ところで、裕福な家庭と貧しい家庭についてである。

この時代、苦小牧では子どもたちが「会社の子」と「町（町方）の子」とに区別されることがあった。親

が王子製紙に勤める家の子と、それ以外の家の子という意味で、「会社の子」の

家庭は安定した給与の他に何かと会社の福利厚生を受けて裕福だった。例えば「会社」の管理職の家庭と、不漁続きの漁業者や築港景

の台所事情を思い浮かべてみるとよい。その差は間違いなく弁当のおかずやおやつに反映され、多分、サケ弁当と日の丸弁当程度の差があることは間違いない。日の丸弁当派が多数派ならばまだよいが、この学校では少数派なのだ。だから問題になった。問題になること自体が立派であろう。ただ、歴史と社会全体を考えるなら、この貧富の差は現在と違ってやや樂觀的なものであった。経済の高度成長が続く、この出来事から10年後の昭和40年代に入ると、自分の生活水準を「中の中」と考える人が大半を占め、いわゆる一億総中流時代を迎えた。誠実に頑張れば豊かになれる時代の中で、サケ弁当と日の丸弁当の差は、多くの場面で縮まっていった。ところがどうであろう。平成不況以降、社員に正規と非正規が生まれ、人が勝ち組と負け組に分けられた。誠実に頑張っても豊かになれない時代の中で、多くの人が先の見えない格差に苦しめられている。これは、一体どのような社会の仕組みからなのか。（一耕社・新沼友啓）



現在の坊主山（王子山）からの風景

にはおやつはない。ほんのひと昔前までは遠足の醍醐味(だいごみ)というのはおやつだった気がする。決められた金額の中でおやつを選んで買う。遠足でお友達とおやつ交換して楽しむ。いつの日からか、そんな楽しい時間が少なくなっているような気がする。昭和39年の写真は、東小学校の遠足の風景。昭和30年代の始まりと終わりの2枚の写真を見比べると水筒がアルミ合金からプラスチック製に、服装が学生服から洋服に変わっている。この8年の間に時代は目まぐるしく変わっていった。

当時の遠足場所であった坊主山に登ってみた。そこから見る今の苦小牧と昔の苦小牧はだいぶ景色が変わっていた。沼だったところは住宅地へ変わり、何もなかったところに川(苦小牧川)ができた。王子の煙突も短い3本から1本の大きな高い煙突へと変わった。坊主山も坊主ではなく樹木が生い茂る山になっていた。

今の子どもたちの遠足の持ち物

（一耕社・斉藤彩加）



◇6

前回掲載した東小学校の遠足の写真について、「これは私が小学1年生の時の遠足の行列。大きく写っているのは1年3組で、この列の中に私がいるはず」と読者から連絡を頂いた。「大野踏切」を渡り、坊主山に向かった記憶があるといい、「東小もやはり坊主山でしたか」とひとしきり話が弾んだ。今回は「運動会」を取り上げる。遠足、学芸会、そして運動会は、小学校の3大行事だった。ただ、近年ではそのどれもが縮小されて教科の授業が膨張している。それがいいのかどうなのか。ともあれ、この紙面では「花形」だったころの運動会を振り返る。

待って行ったのかもしれない。その西小では、昭和25年の運動会に6万円もの予算を組んだ(昭和25年5月14日付「南北朝海」)。同年の勤労者の平均賃金が月額9000円台(全国・勤労統計)であったことを考えると、現在なら200万円ほどになるから、当時の運動会への熱の入れようというのが分かる。

実際、この時期から昭和30年代前半ごろまでは学校ばかりでなく、王子製紙(苦小牧製紙)をはじめとする企業や、町内会などの運動会も盛んに行われていたことが、当時の新聞記事から分かる。戦争、敗戦、物不足という苦難の時代からの解放感と立ち直ろうとするエネルギーの発散の、一つの現れが「運動会」であったのだろうか。

■成長を楽しむ行事
その解放感とエネルギーの発散が、行き過ぎたこと

「子どもの成長楽しむ運動会を」



苦小牧西小学校の運動会応援風景 (昭和30年代初頭)

もあつたようだ。

苦小牧東小学校の加藤虎雄校長は「戦後のレクリエーション運動で組合、会社、青年団などの運動会が盛んなのは好ましいが、諧謔かいはぎやく「ユーモア」が度を過ぎて馬鹿げた競技になったり、親しみが過ぎて非礼になったり、冒険の度が

過ぎてけが人を出したり... 賞品や装飾の度が過ぎたりしてはならない。戦後の世相に照らして、くれぐれも注意を要する」とくきを刺す。そして小、中学校の運動会、競技会については心身を鍛えるなど多くの目的とともに「いずれにしても父母とともに教師が子どもの心身の健やかな成長を楽しむ行事として仕組みを考えるべき(昭和25年5月29日付「南北朝海」だと言)。現在の運動会の取り扱われ

予算たっぷり?の花形イベント

■運動会全盛の時代

創刊当時「南北朝海」といふ題号が付けられていた苦小牧民報の昭和25年以降30年代初頭までのページをめくると、小、中学校の運動会の日程のお知らせが、細かに掲載されている。この頃、小、中学校の運動会はい西小では漁期の終わりを



運動足袋に白パンツの子どもたち (昭和30年ごろ、苦小牧西小学校)

昭和30年初頭 運動会

風景今昔

大小の写真は共に昭和30年頃の苦小牧西小学校の運動会の一コマ。子どもたちはみんな同じ格好。運動会には白っぽい服と運動足袋、そして紅白鉢巻きと決められていたそうだ。みんな前髪を真っすぐに整えている。これじゃあ、自分の家の子がどこにいるか分からないのではないか。全校児童が2000人超えの時代。運動会も大にぎわいだったそうだ。

運動会前にはグラウンドの石拾いをみんなできり、王子製紙が使わなくなった直径約130センチ、幅も130センチほどの巨大な石のローラーを引っ張って整地していたそうだ。どうやって引っ張っていたのだろうか。

運動会の日、実施の可否は朝に花火を打ち上げて知らせた。天気が悪くて開催が危ういときには、花火が鳴るのをみんなが待っていたという。

この頃の運動会では、鉛筆やノートの賞品があったと聞いて

グラウンドは2000人の活躍の場

現在
どと
お今
びく
う。1
は誇ら
組体操
うでな
るよう
お肩
当を校
の子は
当でも
が待つ

方に照らしてなかなか興味深い。

■2部制で運動会

苫小牧西小学校の運動会応援風景 (昭和30年代初頭)

敗戦直後の苫小牧市街地の小学校は西小と東小だけであり、樺太などからの引揚家族や復員による人口増加、つまり子どもたちの増加に対応して若草小学校が開設(昭和27年)され、ベビーブームに依りて北光小学校が開校(同32年)したことは、これまでも記した。その北光小学校で、2日がかりの運動会というものが昭和47年であった。



地域の運動会でリレーのバトンを持つ子どもたち
(年代不詳)

47年だった。

昭和40年代、苫小牧は港が開かれた勢いに乗って、多くの企業が進出し、人口が増え、新たな住宅地が郊外に造成された。まず、糸井地区、現在の日新町、しらかば町の住宅地がそれぞれあった。日軽金社宅や市営住宅ができ、そこに入居した人の多くが若い層であった。その子どもたちが通ったのが、北光小学校だった。日新小(昭和48年開校)はまだない。

北光小の児童数が1年間で500人ほど増え、1

運動会は1日ではプログラムを消化し切れないので2日間に分けてすることに。苫小牧では初めてのケース。1日目は4年生から6年生まで、2日目は1年生から3年生まで。応援の父母も大変だ。「二日がかりの運動会開催を知らされた父母もちよっぴり戸惑いがち。児童が2、3人もいるところでは二日がかりで応援に行かなくては」という声も聞かれ、どんな運動会になるのかと不安そう(昭和47年6月3日付「苫小牧民報」)だったという。

(一耕社・新沼友啓)

現在の西小学校のグラウンドと校舎



来られない子は遠足の時と同様に先生と一緒に食べた。

今の時代、運動会は午前中で終了するからお弁当は無い。賞品なんて無いし、順位も付けたがらない。それぐらい面白さがあってもいいのに…。

子どもたちが一生懸命に旗を振って応援している写真では、グラウンドの上に万国旗が飾られている。これを見るだけで運動会が盛大に行われていた雰囲気伝わります。

当時の地図を持って現地を訪ねた。学校のある場所は変わらない。周囲は、自動車学校も弥生中学校も測候所も無くなってすっかり変わったが、学校は校舎が縮小したくらいでグラウンドの位置もほぼ一緒だ。今はあまり見かけなくなった学校プールがあった。今も使われているといい、これには感激。

写真を撮ることに夢中になっていると、ガラスに襲われそうになった。グラウンドを囲む木に巣があったのだ。昔は、校舎に多くのハトが住み着いて、学校の周囲を飛び交っていたと

(一耕社・斉藤彩加)

今は昼で終了 お弁当もなし

びつくり。順位ごとに賞品が違う。1位の賞品をもらえたときは誇らしかった。選抜リレーや組体操。走るのが得意な子どもでもない子どもみんなが活躍できるようにプログラムだ。

お昼には家の人と一緒にお弁当を校庭で食べるか、家が近所の子は一度帰って食べる。お弁当でも家に帰る子どももごちそうが待っていたという。家の人が